

照葉樹林だより

ISSN 1880-8794

てるはの森の会会報 第15号
2009年7月10日



霧の湧く渓谷 低気圧が近づくと、綾の森は平地より早くそれを察知して、溪流や斜面の森から霧を沸かせ、やがて霧は森を覆い、森は雨に包まれるようになります。(綾南川渓谷 照葉大吊橋上流にて 撮影 坂元守雄)

《 目 次 》

- ★ 照葉樹林文化シンポジウム 2009 が開催されました
- ★ 照葉樹林の豊かさを支える植物
- ★ 森の未来をつむぐ —綾町への研修報告—
- ★ 照葉大吊橋のもう一つの遊歩道
- ★ 森林セラピー基地への道
- ★ 本の紹介「サステナビリティと経営学」
- ★ 事務局だより

発行：てるはの森の会
〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島2丁目9-6 みやざき
NPOハウス403号
TEL 0985-35-7288 / FAX 0985-35-7289
E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp
URL: <http://www.teruhanomori.com>

照葉樹林文化シンポジウム2009 を終えて

実行委員代表 郷田美紀子

新緑が美しい5月10日、綾町のサイクリングターミナルで照葉樹林文化シンポジウムが開催されました。

午前中に森の散策とネイチャーゲーム「森にふれる」がおこなわれ、「ふるまい食で交流」では、摘み草のてんぷら、そば汁、川セリのおひたし、お煮付け、竹飯、ヨモギの団子が振舞われました。

午後は、飯田辰彦氏が「自然の終焉と生活文化の復権」の講演で、失われていく本来の生活文化を育む環境喪失の危惧を強く指摘され、渡辺綱纜氏は、「宮崎の宝を考える・生かす」の中で、故郷田実氏と故岩切章太郎氏の思い出を語られました。

最後に、11名のパネラー（片桐邦雄さん・浜松、米良安昭さん・日向、児玉直近さん・美郷、松本武志さん・美郷、新田章吉さん・美郷、那須右人さん・椎葉、椎葉勝さん・椎葉、那須久喜さん・椎葉）の体験に基づくお話でした。

かつて綾の森にも確かにあったはずの山人達の息づかい。動物を追って山を駆けめぐり、川を渡る姿。山を焼き、ソバの種をまき、豊作を祈り、又、虫やヘビ等の命に手を合わせ儀礼を行う姿。私には厳しい生活の中で謙虚にかつ真摯に、畏敬の念を持って生きた昔の人々の姿がなつかしく、まぶしく感じられてなりません。それは消えさった日々への哀切の思いだけではありません。環境の時代を迎えた現代人の生き方のヒントがあると確信します。



パネルディスカッション

～ 初夏の照葉の森をのぞいてみよう！2009 ～

フェニックス宮崎ネイチャーゲームの会 運営委員長 古田栄子



初夏の綾の森は彩りを増した森の木々がもっとも華やぐ季節。この時季に「初夏の森をのぞいてみよう」と題して、毎年、シンポジウム参加者の皆さんとネイチャーゲームを楽しんでいます。今回は、「森にふれる」と題して、参加者約43名で綾町サイクリングター

ミナル周辺を散策しました。はじめに、<音いくつ>で周りから聞こえてくる“音”を意識した後、4班に分かれ<木のフィールドビンゴ>（感覚を使ってカードに書かれてある項目を見つけていく自然のビンゴゲーム）をしながら尾谷川沿いの遊歩道を歩きました。項目の一つ「本日のスペシャル」は、下見で見つけた「エゴノキの白い花」です。参加者は、コース入口に漂うテイカズラと

トベラの甘い香り、その花姿に誘われ、すんなりとネイチャーゲームの世界に入っていたようです。花ミョウガの葉裏の優しい感触を楽しみ、香りを嗅いだヨモギや先が折られたイタドリ・タラの新芽を見つけると食べ物談義が始まり、人間は自然の恵みを受けて生きてきた！と、頷きあう参加者たち。満開のウツギやスイカズラのステキな白花色、何とか咲き残っていたエゴノキの花に一同ニコリ！。「どうして、この時季は白い花が多いのだろう」という素朴な疑問がわいたり、年輪の意味、聞こえてくる音や同じように見える森の緑にも微妙な違い（種類）があることに気づいたり「落ち葉キャッチ」で風の存在を目で確かめることもでき、参加者は満足そうな表情を浮かべていました。ネイチャーゲームを通して五感をフルに働かせながら照葉樹林を全身で感じることで、木や森に対する想いが深まったのではないかと思います。

<下見・当日に係わった指導員9名>
猪崎悦子、井上柳子、岩本亜紀、川澤博文、黒木政則、中西由美、古田栄子、堀 君子、渡邊俊輔

シンポジウムの「食文化体験」に参加して思ったこと

会員 ブライアン・スモール

「食文化体験」はすばらしかった。初めて食べたものがたくさんあり、うれしかった。「ほんものセンター」で有名な綾町で、本物の「雑草」(Weeds)を食べる機会にめぐりあい、寿命が延びるだろうと思う幸せも感じた。照葉樹林文化シンポジウムに参加して、米国で食育の活動しているマイケル・ポーランさんのことが思い浮かんだ。『食を守れ - 食べる人宣言』や『雑食動物のジレンマ』の著者として知られる。インターネットでインタビューや記事を読んで、作物ではない「草」には驚くほどの栄養があることや、「食」の文化・コミュニティーの大切さがよく分かる。

どこに行っても、温暖化とフードマイルや、新型の病気や大企業の家畜産業が心配な現代なので、宮崎はスローフード運動に参加しやすくて楽しい。5月10日に、綾と一緒に、竹の子、クローバー(シロツメクサ)、オオバコ、クレソン、柿の新芽、ミニトマト、新茶の葉っぱ、などなどを食べた人たちに、また教えて(喋って)もらって、一緒にがんばり(楽しみ)たいと思う。滝一郎さんの「宮崎の山菜」は宝物です!



竹飯の横でタケノコ(ダイミョウチク)を焼く

綾の照葉樹林の文化と森のめぐみ

会員 月脚祐子

今回のシンポジウムの講師の飯田辰彦さんの言葉の中で一番考えさせられたのは「綾には照葉樹林は残っているけど、照葉樹林文化は残っていない。椎葉や南郷は拡大造林の影響で照葉樹林は残っていないけど照葉樹林文化は残っている」というものでした。

確かにそうかもしれないという思いもありますが、だんだん薄れているけど、綾の70歳代より上の方達にはまだその経験や記憶が十分に生きているという希望の光も確実に感じることができます。

実際に他県から移住してきた私からみると、庭先のお茶の葉を摘んで自分で釜炒り茶を作ったり、樫の木などの灰からとったアクにもち米を浸けて、筍の皮を採ってきて包んでかまどで焚いて作るアクマキ作りなど昔からの知恵がたくさん詰まった文化を日々の当たり前の生活の中で体験させてもらえて驚きと美味しさにワクワク、ニコニコしてしまうのです。

今、大切なことは、無くなってしまったものをただ懐古するだけでなく、少しでも残っている大切な文化をまずは知って、そこから現実の生活にどう取り入れるか試行錯誤して、また次の世代に伝えていけるのかということだと思います。

私は今、失われつつある文化をもっと吸収したいし、照葉樹林からの恵みをもっと生活に溶けこませた生活をしたいと思っています。そこには、一番最先端の未来への答えが隠されている気がするのです。人間はどうしたら他の動物や植物達とこの地球の上で共に生きていけるのか?という問いの答えのヒントが・・・。



照葉樹林の豊かさを支える植物

連載⑤ 林縁草本植物

綾の照葉樹林プロジェクト連携会議 委員 河野耕三

陸上で最も発達した森林生態系は多様な植物が外部環境に対してそれぞれ異なる対応をしながら協働して生きています。外部環境には気候や土壌条件等の他に植物自身がつくり出す環境とがあり複雑です。それぞれの植物は複雑な外部環境に対し、長い進化の過程で生理・形態的機能を変化させながら適応し、特有の植物社会（群落）を形成しています。そのような様々な植物群落の総合がその地域での森林生態系を支え、最も多くの生物が生きやすい生物環境をつくり出しています。森林生態系は高木層を構成する森林群落の中核部だけが注目されがちですが、中核部だけで森林生態系は維持できません。発達した森林群落の周りで見られる群落と、その群落を構成する植物による協働作用のお陰で安定した環境が形成され極相群落が維持できるのです。

森林生態系を足下で支えるソデ群落というものが 있습니다。ソデ群落の名は、森林生態系を一人の人間の体と考えた時、寒さや乾燥・強風といった生きるのに厳しい条件から身を守るために、衣服のソデやズボンの裾を綴じる役割を持つという意味（袖）から付けられたものです。ソデ群落の形態や構成種等の特徴や役割には次のようなものがあります。

- ①木本を主とした群落の最外縁部に見られる群落です。
- ②多くの場合、内側にはつる植物を主としたマント群落が続いて見られます。
- ③ソデ群落の外側は崩壊地や日常的干渉圧が強い立地と接しています。
- ④主に草本植物を中心とした植物によって構成されます。
- ⑤森林の色々なタイプ（常緑樹林、落葉樹林、広葉樹林、針葉樹林、高木樹林、低木樹林等々）の違いもありますが、基本的には気候や環境条件（土壌の豊かさ、乾湿の程度、日当たり、人



為的影響の違い等）の影響を強く受けます。⑥それぞれの森林自然植生に対して、それなりの草本植物で構成されるソデ群落が見られます。しかし現実には環境攪乱の影響が強まる中、同じような環境要求をする植物が侵入してきており、複雑な群落をつくっています。その代表的な例が外来（帰化・逸出）植物などが繁殖力と生長力の旺盛さで在来種の生育を押さえている場合です。

綾の照葉樹林域で外来種によるソデ群落の例を見てみると、里地・里山の林縁でよく見られるカラムシ群落があります。カラムシ群落は気候と土壌条件が合いさえすれば沿岸部から内陸



里山農耕地域に多いハナウド群落



里山低山地域に多いクサイチゴ群落

部まで広く生育しています。本来であればヨモギやイタドリ、ドクダミ、イノコヅチなどがそれぞれ優占する群落となるはずのものです。カラムシはかつてはマオとかラミー（現在栽培種のラミーは近縁種）とか呼ばれていたもので、縄文時代から繊維をとるために栽培されたものが放棄されたり、逸出したりして広がったものです。今や本州から南に広く分布している史前帰化植物の中の1つです。カラムシ群落は気候や土壌条件がカラムシの生育に適していたために、生長著しいカラムシが在来種を押さえて優占群落をつくったものです。しかし、カラムシ群落の構成種をよく見るとヨモギやヘビイチゴ、ノチドメ、カキドオシ等が比較的頻繁に混生している事が分かります。ヨモギやヘビイチゴなどはヨモギ群落はもちろんイタドリ群落、イノコヅチ群落と共通の種であることから、カラムシが侵入する前はヨモギ群落やイタドリ群落等、従来から綾町付近に生育していた草本植物によるソデ群落があったものと考えられます。

ソデ群落構成種の幾つかは、森林がある無いかかわらず、地域の自然環境条件に適応した植物です。しかし、多くの植物は森林が創り出す生態的環境と結びついた植物たちです。つまり極相林ほど森林特有のソデ群落構成種が見られ、二次林⇒落葉樹二次林⇒落葉樹低木林⇒マント群落となるにつれ、非森林性で地域の自然環境条件で生育している種が多くなります。このような森林タイプとソデ群落との関係の総体は地域の自然環境を単位としてまとまりのある



標高の高い山地に見られるツクシミカエリソウ群落

特徴をもっています。

このことが分かると、森林が破壊され植生退行が進むにつれて変化するソデ群落とその構成種を詳しく調べる事によって、かつてその立地に存在していた森林の姿を推測することがある程度可能となってきます。あるいは、現在の植生が原植生からどれだけ退行した植生であるか、どんな過程を経て復元出来るのか等々が分かってきます。

現在、綾の照葉樹林域のソデ群落についての調査研究は殆どなされていない状況です。今まで綾の照葉樹林域で観察されているソデ群落を、思い出す範囲で幾つかリストしてみると次のようなものがあります。

【主に里山林縁】カラムシ群落、オドリコソウ群落、ドクダミ群落、ナガバヤブマオ群落、ハナウド群落、セイタカアワダチソウ群落、ヨモギ群落、ミョウガ群落、ヤブミョウガ群落、ミゾソバ群落、シャクチリソバ群落、ノハカタカラクサ群落、チガヤ群落、ススキ群落、アキノノゲシ・カナムグラ群落他

【主に低山地林縁】コミヤマミズ群落、イタドリ群落、フキ群落、ハナタデ群落、ハドノキ群落、ヤナギイチゴ群落、モミジコウモリ群落、キミズ群落、コアカソ群落、クサイチゴ群落他

【主に山地林縁】ヤマカモジグサ群落、シモバシラ群落、ツクシミカエリソウ群落他

ここに示したソデ群落はごく一部です。綾の照葉樹林成立の仕組みを明らかにするためにも、今後の調査が待たれます。

(植生学会会員)



竹野の事業間伐地にて

当協議会は上記四者で構成されるが事業計画の柱にスギ人工林の天然林再生を含み、このため綾の研修は永年の願いであった。屋久島もまた照葉樹林に彩られた島である。世界遺産登録されるような原生的な植生と共に広大な人工林面積も合わせ持つ。今回の研修は、共通の森林・自然資源の未来像をさぐる大切な旅立ちとなった。わが国の基層文化の源流ともいえる照葉樹林の中でも宮崎県の綾町一帯に残る照葉樹林は規模、質共に多様性の高い生態系を持つ貴重な森林として位置づけられている。“照葉樹林といえば綾、綾といえば照葉樹林”として注目を集め、現在そこで取り組まれている、“人工林を照葉樹林に還元しよう”という壮大な計画は、わが国の森林再生の鍵を担うパイオニアプロジェクトと言えよう。今回綾を訪ね、森に分け入り、その名にたがわぬ森と風土、そして人が綾成す照葉樹林が育む文化の息吹を実感でき、(あの「ほんものセンター」の賑わいを見よ!) 想いと力を寄せるたくさんの人との出会いもありがたいものであった。

研修の目的はあくまでも先進地に学び、私たちの島、屋久島において生物多様性保全に立脚しつつ、島の振興や発展まで視野に入れた、森林と人が永続的に係わり合いを持ち、そこから豊かな恵みと英知を得られるための新しい希望に満ちた森造りを目指したいということだ。

今回の研修では、自然や森林に対する思想と実践を学ばせていただいた。意見交換会において「自然や森林の豊かさを経済的な価値だけで判断してはならない」と力強く発言された河野耕三さんには綾の思想的原点を教えられ、大いに励まされた。また、現地を案内していただいて、森林再生を促す間伐に取り組む林野庁や現

屋久島生物多様性保全協議会
屋久島まるごと保全協会
屋久島・ヤクタネゴヨウ調査隊
屋久島町、屋久島環境文化財団
会長 手塚 賢 至

場の方々、手法的なバックアップ体制を担う日本自然保護協会のご苦労も大変なことであろうと察する。屋久島での実践の難しさも痛感した。しかし、このプロジェクトは明らかに現代文明に光をさすものである。森林の再生をとおして、人間性の再生も必ずや実現するからだ。人と自然の共存と地域の持続可能性を問う極めて現代的な課題である。

屋久島の著名なヤクスギ林といえど、基盤は照葉樹林であり、スギもその母懐のなかで安住の地を得ているのだ。大きな視点で眺めれば奄美大島や沖縄のヤンバル、そして西表島と連なる琉球弧の島々も熱帯を帯びながら照葉樹の森が色濃く、また対馬、伊豆大島、はては佐渡まで大きな黒潮の流れに育まれた照葉樹林の島々といえよう。夜の交流会において日本全国の照葉樹林のネットワーク化を図り、照葉樹林とその文化の大切さを発信し、さらに東アジアの照葉樹林帯を含む国際的なネットワークづくりへの夢が膨らんだこともこの研修の副産物ではないだろうか。そんな話題の輪の中に入れたことも幸いであった。今後も、綾にはぜひ先導的な役割を果たしてもらい、ますますのプロジェクトの発展と成就を祈りたい。屋久島でも今回の研修を生かしこの島に適した技術と体制を築きつつ天然林の再生と垂直分布の復元を目指し、他地域との連帯も紡いでいこう。

2泊3日の短い研修で各自実りある体験が出来たのも、たくさんの皆さんのご協力の賜物である。宮崎県、九州森林管理局、宮崎森林管理署、日本自然保護協会、綾町そして格別な手配をして下さった、てるはこの森の会の皆様に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。



綾町役場での意見交換会

照葉大吊橋のもう一つの遊歩道

宮崎文化本舗 高妻孝光

綾の照葉大吊橋には、対岸の国有林の遊歩道とは別に、吊橋を渡る前に右手の階段を登って町有林・県有林を抜ける遊歩道がもうひとつある。照葉樹林文化館と同時期に整備されたが、現在は誰も通らず、一部藪になっているとの情報を受け、てるはの森の会では、「この遊歩道を復活させよう！」と動き始めた。どんなコースか、ボランティアの手で復活できるかを確認するために、2009年2月7日、ガイドボランティアのメンバーを中心に16名が調査ウォーキングを実施し、それに参加した。



日頃パソコンの前にはばかり座っているため、山道を歩くと、案の定、次の日には見事に筋肉痛になった。しかし、やはり自然はいいものである。今、トレッキングなど自然の中で行うフィットネスが人気だが、単調になりがちな運動を自然の中で行うことで、楽しみながら健康を手に入れられるのである。森林浴などの癒しの効果まであるという。

当日は、調査の結果を地図へ書き込む係りを任せられた。今回の参加者は僕より年上の方達ばかりだったが、普段から森を歩く皆さんは健脚だった（というより僕がダメ過ぎる）。石段を登ってしばらく行くと、崩れ落ちたあずま屋があり、スダジイやイスノキの巨木もある。最後尾をなんとか3時間歩いてやっと林道に出た。ついて行けたのは所要所の絶景のおかげである。特に行程の半ばも過ぎた頃の大森

岳の山頂が見える場所は、天然のパノラマ！！帰りは、照葉大吊橋を見下ろしながら林道を下った。みなさんも是非、あの景色をご覧ください！

ホームページも！→ <http://www.teruhanomori.com/chosawalking2009/chosawalking2009.html>

森林セラピー基地への道

会員 坂元守雄

2006年に林野庁、国土緑化推進機構、森林総合研究所によってスタートした森林セラピー基地の認定は、現在、全国で31カ所におよび、宮崎県では日之影町、日南市北郷町、それに綾町の3市町が認定されています。

セラピーとは治療という意味で、セラピー基地とは、これまでの森林浴を一步すすめた、森林がもつ癒し効果を科学的に解明し、健康の増進と健康の回復に生かす場所と理解されます。そのためにはまず、それぞれの認定地がセラピー効果を生む独自の計画をつくる必要があります。豊かな森林景観とセラピー対象者に適した森林ロードなどが第一要件で、加えて、セラピー基地の規模に応じた人と設備が必要でしょう。将来的には療養所の設置なども構想されるものと考えられます。森林は人の健康にどれほどの効果をもたらすものなのか、その科学的解明は、森林と関わりをもつわたしたちに大変関心のあるところです。

ただ、認定された県内のセラピー基地の、これまでの整備計画や事業内容を見る限りでは、3

カ所ともセラピー基地というより、セラピー基地の名を冠した観光案内の傾向が強くなって見受けられます。今のままでは、県内には他にも森林浴の適地があり、多くの人に親しまれているだけに、認定されたセラピー基地は、その特徴が見えなくなる懸念があります

5月11日の宮日新聞は、綾町が今秋からセラピー基地計画を本格化させると報じました。日之影町、北郷町に先がけて、森林セラピー基地の特徴的機能を備えた計画が出されるものと期待をもって注目しているところです。



本の紹介

『サステナビリティと経営学』 足立辰雄・所伸之 編著

ミネルヴァ書房 2009年 2940円

「現代社会を読む経営学」全15巻の一冊で、その第12章に上野登執筆の「照葉樹林と宮崎県綾町」があります。持続可能な社会へのビジネスモデルを探求することを目的とした本書の中で、環境NPOと自治体が行っている事例として取り上げています。

1967年、郷田實町長が照葉樹林伐採計画を止めたことから始まった環境保全の町づくりの流れを示し、2005年に発足した「綾の照葉樹林プロジェクト」までを解説。本プロジェクトの歴史的な位置付けと今日的意義を改めて認識できる論考となっています。(会員 小川渉)



事務局から



◆照葉樹林をガイドが案内します♪

照葉大吊橋の遊歩道をガイドボランティアがご案内します。グループでも少人数でもOKです。ガイドの解説を聞きながら、綾の森の魅力を再発見してみませんか？



案内場所 照葉大吊橋遊歩道 (約2km)

所要時間 約2.5~3時間

※ガイドの案内を聞きながらゆっくり歩きます。

料金 1人500円 (10人以上 1人400円)

期間 通年実施

服装 長袖・長ズボン・滑りにくい靴・帽子

☆申し込み及び問い合わせ先☆

てるはの森の会

TEL 0985-35-7288

FAX 0985-35-7289

teruha@miyazaki-catv.ne.jp

◆「てるはの森の会」関連行事

- 5月9日(土)10日(日) 森林の市
- 10日(日)綾照葉樹林文化シンポジウム 2009
- 14日(木)第1回地域づくりWG
- 18日(火)第2回連絡調整会議
- 26日(火)てるは定例会
- 6月8日(月)第10回綾プロ連携会議
- 15日(月)第2回地域づくりWG
ふれあい調査
- 7月14日(火)第3回連絡調整会議

◆森林の市に参加しました！

5月9日と10日、東京日比谷公園で開催された「森林の市」に参加しました。ヒノキの間伐材を使った「モックン」キーホルダー作りと照葉樹林クイズをしました。

キーホルダー作りでは、子供から大人まで独創的



な作品がたくさん出来上がりました。毎年楽しみにされている常連さんもうらっしゃいます。

クイズ回答者には、綾町特産日向夏がプレゼントされました。

会員募集中！

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費	個人サポート会員	2000円
	家族サポート会員	3000円
	団体サポート会員	5000円
	法人サポート会員	10000円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年4回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。詳細は事務局までお気軽にお問合せください。

協賛企業

